

研究データ管理(RDM)とオープンデータの未来

～研究データは宝の山！マネジメントの最前線～ (2)

講演
安心安全な研究データ管理・流通の
実現に向けて研究活動の不正行為
(捏造、改ざん、盗用)対策への課題と挑戦

鈴木 和幸 (富士通株式会社)

データ流通を題材にした
現在の国内での
動向や「うまく
いかない点」
などお話しします。



国内の文教領域でもDX化
が求められていまして、
ICTを活用した教育・研究
データの流通が進められ
ていて、具体的には
「データ利活用環境」の
整備が行われています。

そのためには大学内、
大学間、大学企業間での
データ流通とそのデータ
に対する信頼性、客観的に
正しくあることを証明する
ことが重要です。

データを活用する場合に
「研究ネカト」と表現して
いますが、捏造、改ざん、
盗用が行われていないか
気を付けなければ
なりません。
データを作る側の人間の
「このくらいならバレない
だろう」という意識が
不正を生み出してしま
います。
人の心は弱いもので、
第三者によるチェックが
有効なのですが、機能して
いない場合も多いです。
対策としては「関心・必見」
の部分プロセス・システム
でフォローすることで改善
できないかと考えています。

関心：世間の目、第三者の目

必見：必ず見つける

必罰：必ず厳しく罰する

●「研究ネカト」の対策

研究ネカト(捏造・改ざん・盗用)

データに信頼性がない

経歴詐称

●「データ流通」の3つの問題



●文教領域における国の活動
と関連省庁

●最近テレワーク中心なので、
人前で話すのは久しぶりです。

データの信頼性の話では
フェイクニュースがあり
ます。災害の時などにも
出てくるので問題です。
偽情報に対策に国が
巨額費用を投資する
ような社会現象と
なっています。
データの裏取りには
コストがかかるというて、
誤ったデータでの研究では
信頼の失墜となります。
対策としては、得られた
実験データを正しく蓄積し、
活用時に保証することです。
経歴詐称の問題も対策が
必要となっています。
これも「どうせ判らない
だろう」という気持ちか
原因で、デジタル署名等
の証明する仕組みが必要
です。
これらのことからデータ
流通には情報の信頼性
(トラスト)の確保が
必要で、データに価値
としての「お墨付き」を
与えるシステムとして
「CaaS」をクラウド
サービスとして提供
しています。
分散された個人・企業の
情報を信頼を担保する
技術で、安心・安全・自由に
連携することができま
す。
今後、様々な分野でデータ
流通を加速させるCaaS
としての「Data e-Trust」
の連携などを通じ、研究データ
の価値向上に貢献できれば
と考えています。



●大量の情報から、どのくらい
の人がフェイクと見抜けるので
しょうか



●CaaS: Computing as a Service
を利用いただけます。



●「Data e-Trust」の活用



●「Data e-Trust」へデータを正しく蓄積

パネルディスカッション
「研究データ管理(RDM)とオープンデータの未来
～研究データは宝の山！マネジメントの最前線～」
上 集積された研究データは巨大な「宝の山」であり、学術研究
の基盤として、今後、確立されていくと思います。そのためには、
どのような管理のポリシーが策定され、実施されていくことになるか。
また、どのように研究データが蓄積されるべきでしょうか。
下 研究データ管理ポリシーは既に65の大学で策定され
ています。重要なのは「管理する主体は誰ですか」と
いうことです。研究機関が管理するオーナーになると、
研究した研究者が自由に使えないということが起こり
ますので、データのオーナーは研究者とし、研究機関は
データを置き場所を提供する役割ということになりました。
ただこの方式だと、研究者が所属を変更する場合に起こる
「研究データの移動」がかなり面倒になってしまいます。
そのため、研究データは「研究機関が管理する場合」と
「研究者が管理する場合」に分けたポリシーの策定の
方向性も良さそうです。
上 実際にデータ管理の上では、個人で管理するよりも、
複数人が管理できるような仕組みを研究機関が用意して
くれて、そのストレージに置くのがやりやすそうですが、
岡さんの大阪大学での取り組みはいかがでしょうか。
岡 今、大阪大学研究データポリシーを読みますが、
なるほど、「データはなるべく社会に公開し、活用促進に
務めなさい」とありまして。私がやっているデータは
個人情報を含みますので、それを含まないデータは公開
していくことなるかと思っています。ただ、アクセスできる
アカウントの管理を考えると、それが企業さんだったり
別の国からと考えると、もっと勉強がします。
上 今のへんに関してメーカーさんどのように考えて
いらっしゃいますか。鈴木さん。
鈴木 結局、「正しい手段ではないやり方で得られた証拠は
裁判で使えない」という話で、どのようにデータを手
したかということも大事だと思っています。研究成果
というのはアウトプットデータなので、その信頼性を
証明するインプットデータが重要なんだなあ、と思います
それが「鏡」となるので、ルールが曖昧なところを、今後、
検討していくことだと思います。
上 信頼できる研究データにしても、その管理にしても
最終的には「誰が信頼できるんですか」というところが
効いてくるという印象を持ちました。



上 上 義史
(長崎大学)



下 山 武司
(国立情報学研究所)



岡 真太郎
(大阪大学歯学部附属病院)



鈴木 和幸
(富士通株式会社)

モデレータ 上 繁 義史之 (長崎大学)
パネリスト 下 山 武司 (国立情報学研究所)
岡 真太郎 (大阪大学歯学部附属病院)
鈴木 和幸 (富士通株式会社)